**「お前たちがどこの者か知らない」**

**年間第21主日・C年（16.8.21）**

**救いはすべての民に及ぶ**

　のみことばから、あえて一つの主題を設定するとするならば、次のようにまとめることができるのではないでしょうか。すこし長くなりますが、つまり、「神の国の救いは、すべての民に及ぶまさにスケールがとてつもなく大きく満ち溢れる恵みであるが、同時にすでに選ばれた者は、その特権にあぐらをかいていることは許されない。なぜならば、その選びにふさわしい生き方を実践しないなら、救いの完成の暁に『お前たちはどこの者か知らない』と締め出される危険性がある。」となるのではないでしょうか。

　それでは、まず、第一朗読から少し丁寧に読み返して見ましょう。

　今日の朗読箇所は、旧約聖書にあるイザヤ書（第三イザヤ）の最後の章からとられております。

　実は、この第三イザヤ（56-66章）が書かれたのは、紀元前６世紀ですが、それは、まさに50年以上にわたる屈辱の捕囚時代をようやく終えて故国に帰ることができ、エルサレムの神殿を再建できた時代であります。ですから、そこで、神の民イスラエルは、あらたに次のような使命を、主なる神からいただくのであります。

　**「わたしは、・・・すべての国、すべての言葉の民を集めるために臨む。**

**彼らは来て、わたしの栄光を見る。・・・さらにわたしの名声を聞いたことも、わたしの栄光を見たこともない、遠い島々に遣わす。彼らはわたしの栄光を国々に伝える。・・・あらゆる国民の間からわたしの聖なる山エルサレムに連れてくる、・・・わたしは彼らのうちからも祭司とレビ人を立てる、・・・」**

つまり、異邦人全体が**「主の栄光を見る」**のであります。それはまさに偶像の無意味さが暴露され、主なる神だけが、の唯一の神であることがすべての民に知らされるからにほかなりません。ただし、その主の栄光を目の当たりにしても一向に悟らず、神と共に生きることに失敗する落伍者も出ることでしょう。

　さらに、異邦人の中からも、なんと**「祭司とレビ人」**が召し出され、ユダヤ人と異邦人との区別の垣根も取り壊され、皆が一つになって神を礼拝するときが、必ず訪れるという大いなる期待を掛けることができるのであります。

**お前たちがどこの者が知らない**

次に、今日の福音ですが、ルカ福音の文脈では、その後半部に当たる箇所であり、イエスが弟子たちと一緒に死を覚悟でエルサレムに向かう旅の途上にあることが確認されます。とにかく、そのような緊張感のある状況において、なんと**「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」**というまさに核心に触れる質問を受けられます。それに対して、イエスは極めて示唆にとんだ説明を丁寧に展開なさいます。まず、冒頭で、いきなり**「狭い戸口から入るように努めなさい。」**と命じられます。つまり、救いは数の問題ではなく、あくまでも救いをどのように獲得するかというまさに生き方の基本的姿勢にかかわることなのであります。ちなみにここで言われている**「努めなさい」**ですが、「運動競技者が勝利を得ようとして心身を鍛える努力」を意味します。

　なぜなら、神の国の戸口は、極めて狭く、したがってだれも容易に入ることが出来ないからであります。

　ですから、信仰による救いへの道を歩み続けるには、まさに生ぬるい信仰は、役立たないということではないでしょうか。実は、パウロも自分の体験から次のようなアドバイスを分かち合ってくれます。

　**「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみに与って、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。わたしは、すでにそれを得たというわけではなく、・・・何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身はすでに捕らえたとは思っていません。**

**なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」（フィリピ3.10-14）**

**主は愛する者を鍛える**

　ちなみに、今日の第二朗読は、信仰における訓練についてまさに適切な勧めを、したためております。朗読箇所は、ヘブライ人への手紙からとられておりますが、実は、この手紙は、三世紀以降、徐々にパウロの手紙を見なされて来ましたが、むしろ、ユダヤ教の教養を身に着けた無名の著者が、特定の共同体宛てに送った手紙と見なされるようになりました。

　いずれにしても、今日の箇所は、信仰の道における訓練について、極めて適切に勧告しているのではないでしょうか。

　まず、結論から先に言うならば、神は愛する者を鍛えてくださるということにほかなりません。ですから、親子関係の文脈で説明しております。

　**「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。**

**主からの懲らしめられても、力を落としてはいけない。**

**なぜなら、主は愛する者を鍛え、**

**子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」**

　これは、旧約聖書にある箴言のギリシャ語訳からの引用ですが、信仰は守るだけでなく、訓練が付き物であることを強調しております。

　では、具体的に信仰の歩みにおける訓練を、どのように実践すればよいでしょうか。

　実は、今日の箇所の前の４節で、**「あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことがありません。」**と断言しておりますが、まず、信仰の道において罪と闘いながら自分自身を、鍛えることが出来るのではないでしょうか。ですから、パウロは、悪と戦うことを次のように勧めております。

　**「主により頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に付けなさい。わたしたちの闘いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手とするものです。・・・立って、真理を帯びとして腰に締め、正義をとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。」**

かつてのわたしたちの信仰の偉大な先達たちは、すなわち、200年以上にわたって司祭が一人もいない迫害時代を見事に耐え抜いて、子孫代々信仰を絶やすことなくしっかりと伝え続けました。それが出来たのはまさに彼らの信仰が鍛えられていたからではないでしょうか。つまり、家族を中心に信仰共同体の支えによってあらゆる困難に打ち勝つ信仰に鍛えた実りにほかなりません。ですから、わたしたちも、日々の生活の只中で、信仰における訓練の具体的な方法を見出し、それを実践できることができるように共に祈りましょう。